

文学館だより

令和5年10月1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文責 日高 第90号

第73回 牧水祭（牧水没後95年）4年ぶりに全日程開催

主 催 日向市・日向市教育委員会・日向若山牧水顕彰会
期 日 9月17日（日） 牧水の命日 没後95年



コロナ禍と台風接近による規模縮小開催を経て、実に4年ぶりに牧水祭全日程を開催することができました。牧水没後95年の今年、牧水を偲んで200名に及ぶ方々がお越しくださいました。

牧水長男旅人の孫 新美麻里様をはじめ、牧水姉トモの子孫の方々、牧水姉シズの子孫の方々もお越しくださいました。そこには40年ぶりの再会を喜ぶ姿があり、牧水先生から今に繋がる形を目の当たりにして感動すら覚えました。歌碑祭を前に、裏山歌碑への献酒から今年も始まりました。（写真 伊藤一彦館長）

【第1部 歌碑祭】 牧水生家横夫婦歌碑前において短歌朗詠、献酒

午前9時30分。第73回牧水祭歌碑祭が始まりました。それまでの和やかな雰囲気とは一転。背筋が伸び厳かな空気が一帯に漂います。

坪谷在住、顕彰会会員 岩下富男氏による牧水短歌朗詠が幕を開けます。声量と張りのある声に皆の動きはピタリと止まり、耳を傾けます。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り
日向の国むら立つやまのひと山に住む母恋し秋晴の日や



巫女による献酒



左 那須 文美会長
右 小林 理教前会長

【第2部 牧水を偲ぶ会】

講演 『牧水と伊藤一彦』～牧水との出会い、そして今～ 講師 伊藤一彦氏（歌人、若山牧水記念文学館館長）

早稲田大学時代の同級生、福島泰樹氏との出会いが短歌を詠むきっかけになったことはあまりにも有名な話ですが、それから歌を詠み続けて60年という伊藤先生。牧水は東京にいなければ文学はできないと言い、ふるさとを愛しながらもふるさとに帰らなかった。牧水の生き方の根本には何があるのだろうか、という謎を解き明かすために牧水研究に情熱を傾けるようになった伊藤先生。

牧水没後95年であること、昨年秋の叙勲『旭日小綬章』受章記念の「伊藤一彦展」が開催中であることから、今回は伊藤先生に講演をお引き受けいただきました。

牧水短歌を引きながら、牧水の思いや作風をいつもながらに（いいえいつも以上だったかも知れません）熱く語られました。

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く
なにゆゑに旅に出づるや、なにゆゑに旅に出づるや、何故に旅に
降ればかくれ雲ればひそみ晴れて照るかの太陽をこころとはせよ 抄出18首

先月、傘寿を迎えた伊藤先生。現代短歌会牽引の日々はこれからも続きます。

「坪谷に恩返しがしたい」と、坪谷小学校卒業生 竹内美結さんがボランティア参加しました。スタッフ業務を率先して手伝う頼もしい姿でした。来年も・・・と言って別れました。

「伊藤一彦展」開幕

9月10日（日）～11月26日（日）



昨年、伊藤先生が秋の叙勲『旭日小綬章』を受章されたことを記念して「伊藤一彦展」が文学館企画展示室にて現在開催されています。開催初日、日向市・日向若山牧水顕彰会・若山牧水記念文学館主催による記者会見を開き、企画展開催を祝いました。

60年歌を詠み続けていらっしゃる伊藤先生でありながら、「感謝」という言葉を何度も何度も口にされ、さらに「今日は珍しく緊張しています。結婚式と同じくらいの緊張です。」とおっしゃっていたことがとても印象的でした。

今回の企画は、【短歌との出会い】【牧水との出会い】【宮崎でうたう】と三部構成をとり、関わりの深い方々から伊藤先生との出会いや伊藤一彦人物像に迫るエピソードを寄せていただきました。既に見学された方々から「見応えがある。」「観る展示ではなく、読む展示だ。」との感想もいただいています。

これまで、これから

伊藤 一彦

これまでのことを考えると、感謝の念でいっぱいです。薬屋の長男なのに、両親が早稲田の文学部に進むのを許してくれたこと、その早稲田で福島泰樹に出会って短歌の魅力を知ったこと、早稲田の先輩の佐佐木幸綱さんを知り「心の花」に入会し学んだこと、そして名前をあげればキリがないほどたくさんの歌人に助けられ支えられたこと……。ひたすら感謝です。

若山牧水が宮崎の大先輩の歌人としていることはいつも誇りです。その牧水顕彰の「若山牧水賞」の創設とその後の運営は私にとって大きな出来事です。県と宮崎日日新聞社と日向市と延岡市の協力でできた有難い賞ですが、大岡信さん、岡野弘彦さん、馬場あき子さんは選考委員を引き受け下さって本当に有難く嬉しかったです。大岡さんは残念ながら亡くなられましたが、日本の詩歌を代表するこの委員の方々には賞の選考以外にも数々の支えと励ましをいただき感謝の念しかありません。第一回の受賞者が高野公彦さんで、今まで三十人の受賞者がおられます。その人たちが皆さん宮崎において下さって共に牧水や短歌について語りあったことは私の大きな財産になっています。皆さん、現代歌壇の優れたリーダーです。

私の働きかけで始まった「牧水・短歌甲子園」も主催者になってくれた日向市に大いなる感謝です。今や代表的な高校生の短歌大会ですが、俵万智さん、大口玲子さん、笠公人さんの審査委員の見事な審査、そして「牧水・短歌甲子園」のOB・OGの積極的な協力にも感謝です。

一方、高齢者支援の「老いて歌おう」の大会も県社会福祉協議会、「空の会」、鉱脈社のトロイカ方式で年々発展しています。有難いです。

これらの活動を皆さんと持続し発展させたいと思いますが、個人のことで言えばもっと短歌作品をつくりたいです。心身の健康が許すかぎり一首でも多く詠んで未知の自己と短歌に挑戦したいです。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

降ればかくれ畳ればひそみ晴れて照るかの太陽をこころとはせよ

依頼者から求められて詠んだ作品とみられ、掛け軸には「大馬鹿に奈る法を詠めと乞はれて」と、添え書きがある。掛け軸を納めた木箱には「全集にも、また全歌集にも日記にものこされておらず未発表のままうづもれていたこの世に一首のみと云う貴重な一首」と牧水長男旅人が書いている。大正11年ごろの作品とみられるという。

宮崎市の元医師が収集、その遺族が県立図書館に寄贈した201点中の作品であり、この1点が未発表作であることを2018年12月、県立図書館が発表した。

前述の牧水祭講演の中で、伊藤先生が抄出18首の最後に引いた一首である。

(2018.12.11 朝日新聞宮崎版参照)